

学会記事

日本家庭科教育学会 第61回大会報告

基調講演とトークセッション

“未来をつくる力”と家庭科

基調講演：内田 樹 (神戸女学院大学名誉教授・凱風館館長)* 代読
トークセッション：草谷 緑 (NHK国際放送局多言語メディア部)
南野 忠晴 (元大阪府立高等学校家庭科教員, 葉流乃音経営)
高木 幸子 (新潟大学)
コーディネーター：荒井 紀子 (大阪体育大学)

「基調講演とトークセッション」趣旨

弘前大学 日景 弥生

家庭科が誕生してから約70年が経過した。その間、生活科、総合的な学習の時間や、「公共」などが新設され、それらは家庭科にボディブローを与えている。

一方、高等学校家庭科女子のみ必修から男女必修への劇的な移行は、多くの家庭科教員に期待と希望を与えて発足し、既に20年が経過した。当学会が実施した調査によれば、高等学校家庭科を履修したほぼ全員がその有用性を認識し、家庭科学習は現在の意識や実践と関連がみられた。また、履修した男性は、現在のパートナーシップ実践度が高くなり、男女必修家庭科は特に男性の実践に影響を与えていることが推察された。

生活は自身の営みのなかから様々なことや考えなどを習得し、自分自身がつくっていくものであり、生活の中で考えることが社会へとつながっていく。また、その目指す方向も一人ひとり異なり、そのことが、生活の営み全般に関わる家庭科としての“面白さ”ではないかと考える。

本基調講演とトークセッションでは、【“未来をつくる力”と家庭科】というテーマで、基調講演者に内田樹氏を迎え、シンポジストに南野忠晴氏、高木幸子氏、コーディネーターに荒井紀子氏に依頼した。しかし、内田氏は関西地方の豪雨のため、メッセージでの参加となった。それにより、急遽、シンポジストをNHK国際放送局の草谷緑氏に依頼した。各氏のお考えをうかがい、家庭科教育の未来について活発な議論を展開する場としたい。

基調講演 「家庭科が大事と思ったわけ」

神戸女学院大学名誉教授・凱風館館長

内田 樹

*基調講演をいただく予定の内田樹氏が、豪雨による交通機関の乱れにより不参加となった。幸いにもご講演内容についてのメッセージをメールにて直前にお送りいただくことができ、会場で代読した。ここでは、講演記録の代替として、大会要旨集掲載の抄録（一部抜粋）と、送付されたメッセージを掲載する。また、この大会翌日にNHK国際放送局の草谷氏（当日のシンポジスト）が内田氏に取材し編集したラジオ番組の内容についても、内田氏のメッセージを理解するうえで貴重なものであるため、抜粋して追加掲載する。合わせてお読みいただきたい。

〈抄録〉 僕が家庭科が大事だと思ったわけ

子どもが6歳のときから18歳の時まで父子家庭だった。その間にはよく家事をした。「父子家庭」という大義名分があったので、日々エプロンをして楽しく働いた。でも、そのうち娘が大きくなって家を出て、一人暮らしになったら、ぱたりと家事を止めてしまった。手の込んだ料理も作らないし、縫物をするのも間違になった。能を稽古しているので、紋付の半襟を縫い付けるくらいのことはたまにやるけれど、どうせ自分の着物だと思っているせいで仕事がぞんざいになる。とても娘の体操着に名札を縫い付けた時の集中力には及ばない。

私は家事仕事が好きだし、けっこう得意だけれど、

いつでも時間を忘れて熱中できるというわけではない。「誰かに尽くす」とか「誰かを守る」というマインドセットにならないとこういう仕事にはうまく集中できないのかも知れない。自分のためだけだと今ひとつやる気にならない。

友人に父親の介護をしている時、料理が好きになった男がいる。それまで料理なんかほとんど作ったことがなかったのだけれど、父がなぜか彼の作る料理を「美味しい美味しい」といって食べてくれるのでうれしくなって、料理本を買い、毎日新しい料理に挑戦しているうちに、すっかり料理好きになってしまった。包丁や鍋釜も各種調べた。でも、父親が亡くなったとたんに料理を作る意欲がぱたりとなくなってしまうそうである。自分自身のためには凝った料理を作る気がしないのだと言っていた。その気持ちはよくわかる。

家事というのは、本質的に他人の身体を配慮する技術なのだと思う。

清潔な部屋の、乾いた布団に寝かせ、着心地のよい服を着せて、栄養のある美味しい食事を食べさせる。どれも他者の身体が経験する生理的な快適さを想像的に先取りする能力を要求する。家事においては、具体的な技術以上に、その想像力がたいせつなのだと思う。

私はいま武道を教えて生計を立てているが、武道の要諦もまた他人の内部で起きていることに感覚の触手を伸ばすことにある。そういう能力は他者との共生のためには必須のものだと私は思うのだが、家庭科も武道も現在の学校教育では基礎科目とはみなされていない。たぶん他者との共生には特別な技術など要らない、あるいは有限の資源を奪い合うラットレースの競争相手の心身の状態など配慮するに及ばないと思っている人たちが教育制度を設計しているからだろう。

〈講演メッセージ〉

みなさん、こんにちは。内田樹です。

学会で講演とシンポジウムに出席する予定でしたが、西日本の大雨で、鉄道ダイヤが大幅に乱れ、「鉄道での旅行は見合わせるように」というJRからの勧告を受けて、今日の学会出席を諦めることにしました。

一年以上前からご準備頂いたのに、申し訳ありません。今日の講演で申し上げたかったことをすこし短くまとめて申し上げます。

抄録にも書きましたように、私は家事というのは、本質的には、「他人の身体を配慮する技術」であると思っています。

ともに生活する人たちに清潔な住環境を提供し、着心地のよい服を着せて、栄養のある美味しい食事を食べさせる……。それらの作業はどれも他者の身体が経験する生理的な快適さを想像的に先取りする能力を要求します。私は家事においては、料理や裁縫といった個々の具体的な技術以上に、他者の身体が経験していることについて想像力を働かせることが大切だと思っています。

そういう発想法は私がいま武道を教えて生計を立てているということと関係があるのかも知れません。武道の要諦は何よりも「他人の身体の内部で起きていること」へ感覚の触手を伸ばすことにあります。

(中略)

このような他者の中で起きていることに同期する能力は本来すべての人間に潜在的には具わっていると思います。そして、それは人間が共同的に生活するためにたいへんに重要な能力ではないかと私は思います。そのような能力があったからこそ、人類は、単独では、他の野生獣のような強さも敏捷さもない種であるにもかかわらず、地上における支配的な種として生き延びることができた。私はそういうふうと考えています。爪もない、牙もない、空も飛べない、水中でも生きられない。でも、人類は他の野生獣にはできないことができた。それは同種の他の個体と「つながる」ことです。何人も、何十人も、場合によっては何百人、何千人もの個体が集まって、一つの「共同的な身体」のようなまとまり形成して、まるでひとつの生き物のように感じ、判断し、行動する。それができたことが人間のきわだった特徴であったと私は考えています。

私はいまは武道の稽古を通じて、この「他者と同化する力」を育てるプログラムを作り上げようと努力しております。武道が目指すのは「いるべきところに、いるべき時にいて、なすべきことをなす」ことです。それは誰かが教えてくれることではありません。マニュアルもガイドラインもありません。武道のことばでは「座を見る。機を見る」という言い方をすることもあります。いるべき場所、いるべき時、なすべきことを自分で選択し、決断しなければなりません。誰も自分

に代わって選択し、判断してはくれません。

いるべきところ、いるべき時、なすべきことを決めるのは、私の自由意志ではありません。そうではなくて、私たちに対する他者からの「呼びかけ」です。「呼びかけ」、英語で言えば、vocationとか callingということになるでしょう。これらは「呼びかけ」とともに「天職」「召命」を含意する語です。他者からの呼びかけに答えて、私たちは自分がいつどこでなにを果すべきかを知る。「呼びかけ」のうち、もっとも受信しやすいのは、「救い」を求める声です。飢餓、寒さ、痛みなどは、どれもそれを放置すると命にかかわる身体感覚ですが、それはいずれも他者の緊急な介入を求めています。ですから、非常に発信力が高い。

人倫の基本は「惻隱の情」ですが、この「惻隱の情」というのは、いささか堅苦しい言い方に言い換えると「緊急な介入を求める他者からの救援信号を感知すること」ということになるかと思えます。

先ほど、家事に必要なのは、他者の身体で起きている出来事に対する想像力だということを申し上げました。日々の穏やかな生活において、私たちは共に暮らす人たちからの「清潔な住環境」や「着心地のよい衣服」や「美味しい食事」などを求める穏やかな「呼びかけ」を聞き取ることができれば、それで十分です。

でも、その呼びかけを聞き取れる能力は「緊急な介入を求める他者からの救援信号を感知できる能力」と同質のもので、「惻隱の情」と同根のもので。それは人間が他者と共生できるために、必須の能力です。

学校教育とは、子どもたちが「他者と共生できる能力」を身につけることができるように支援することだ、というのが私の個人的な定義です。

この場合の「他者と共生できる能力」の中には、言語によるコミュニケーション能力や、合意形成能力や、「公共意識」など、さまざまなものが含まれますが、どれほど高度な社会的能力にせよ、その基本には、「惻隱の情」すなわち「他者からの緊急な介入を求める呼びかけを聞き取る力」、そのさらに基本には「他者の身体経験、生理過程に想像的に同期できる能力」がなくては済まされません。

家庭科教育はまさにそのような能力の開発にフォーカスした教科であろうと私は考えています。生活をともにする人たちの身体の内側で起きていることに想像

的に触手を伸ばすこと。

そのような能力がどれほどたいせつなものであるか、それについての社会的な合意はまだ不足しているように私には思われます。

以上、講演でお話しようと思ったことの一部を抜粋しました。学会のご盛会を祈念しております。

*メッセージ全文は、以下のブログでご覧いただけます。

内田樹の研究室 blog.tatsuru.com/2018/07/07_1911.html

〈追加掲載〉

学会当日、内田氏に代わって急遽登壇した本学会員でNHK国際放送局の草谷緑チーフ・ディレクターが、自身が制作する海外向けラジオ番組で、内田氏への直接インタビューと本学会への内田氏のメッセージに関わる内容をとりあげ、その番組が7月26日に17言語で放送された。番組名は、NHK WORLD-JAPAN 『『暮らしと社会のキーワード』番外編』である。番組では、学会当日の内田氏による学会宛てメッセージや、それを聴いた学会参加者の様子や反応が紹介されている。また、参加者の質問を、学会理事の佐藤ゆかり氏が内田氏に問いかけ、内田氏がよりわかりやすく語っている場面も収録されている。

番組の内容が、大会の内田氏からのメッセージと関連が深いと判断し、NHK国際放送局に、内容の一部を引用する許可を得た。

以下、番組の言葉を再現し、一部を抜粋して紹介する。

番外編 内田樹が語る「家庭科が大事なわけ」

日本では小学校から高校まで家庭科は必修で、あらゆるトピックを広い視野で学びます。この教科の学会(日本家庭科教育学会)で、内田さんからのメッセージが読み上げられました。

「私が家庭科教育に求めるのは、『緊急な介入を求める他者からの救援信号を感知できる力』を涵養することです。学校教育とは、子どもたちが『他者と共生できる能力』を身につけることができるように支援することだ、というのが私の個人的な定義です」

「感知できる力」いいかえるならば、「察する力」のような目に見えないものが、教科教育の研修の場で直接議論されることはあまりありません。会場の参加者は、意外な切り口に驚きました。

参加者「すごく納得しました。でも、家庭科教育としてどう実際の授業につなげられるのか、まだ正解が見えてこないです」

上越教育大学の佐藤ゆかりさんが、大会時の内田さんからのメッセージや参加者の反応を糸口に話を聞きました。

佐藤「『緊急な介入を求める他者からの救援信号を感知できる力』について、もう少し噛み砕いてお話しいただけますか」

内田「競争の中で他人を押しつけて打ち勝っていくのが生きる力だと思っている人が多いけれど、それは違います。生きる力とは、みんなと協力的に、支えあって生きていける能力のことです。そのために一番大切なのは自分を呼ぶ声を聞き取る力です。社会的に成熟し、自分の社会的責務を果たすことも、自分の天職に出会って才能を発揮することも、すべて聞き取る力から始まっています。そして、人間が最大の力を発揮するのは『助けてください』と言われた時です。そのかすかな信号を聞き取り、そこに向かって歩んで行き、『何をしたら良いですか』と自分の方から問うていく。その能力が、すべての社会的能力の一番基本にあると思います」

内田さんは、この力を育てるのが家庭科だといいます。栄養のあるおいしい食事を作ることや、住まいを清潔で快適に整えることは、身近な人の身体と心を気遣うことから始まると考えているからです。

佐藤「お話を聞いて、家庭科教育でできることは、子ども一人ひとりの生活の課題を、(家庭と学校という)境界線をまたいで教室にもってきて、一緒に考えることではないかと思いました。そして、具体的には調理実習などがそうかもしれません」

内田「そう、コラボレーションです。分担して、時間を合わせて、手順を決めて、何人かが一つの共同的

な身体のように動く。それはものすごく役に立つと思います」

内田さんが、家事が生きる力に直結していることに気づいたのは、18歳で家を出た娘さんとの2人暮らしの経験がきっかけだったそうです。

内田「仕事の帰りにスーパー行って、今日私は何食べたいんだろうと、考える。そして家に帰ってエプロンをつけて、とんとんとんとんと刻む。手際よく料理している時は、すごく自尊心が高まります。価値あるものを自分が創造し、「財」をこの世にもたらした。それは本当に大きいことだと思います」

日本では、かつてセーフティネットとして機能していた家族や地域が力を失っています。内田さんは、これからの社会は、子どもや高齢者、病気や貧困に苦しむ人など弱者を基準に作るべきだと考えています。そこでは、様々な弱さを抱えた人たちが集まり、お互いに補い合うような地域の共同体が必要だと語りました。

内田「自分が得意なことはやって、得意でないことは人にやってもらい、デコボコな割れ鍋に綴じ蓋のように相互依存するほうが健全だと思います。そのときに貨幣を媒介するべきでないと思います。そうすると結局『とにかく金がほしい』となってしまいます。根本にあるのはどうやったらみんなが共同的に幸せに暮らしていけるかということです。自分に与えられた歴史的・地理的な環境の中で、それを具体的に考えて行動していく。家庭科はそのための術だと思います」

*この番組は、NHKの海外向けラジオ放送で、日本に関する情報を17言語で世界に発信するものであり、日本の子どもが家庭科で学ぶ用語の解説を通して、日本の社会や人々の暮らしの現在を伝えている。番組でこれまでに取り上げられた用語には「自立」「介護保険」「制服」などがある。放送は毎月1回第4木曜日。『暮らしと社会のキーワード』

英語版URL:

<http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/radio/keyword/>

トークセッション

「未来をつくる力と家庭科はどうかかわるか」

国際発信の現場から見る家庭科の可能性

草谷 緑 (NHK国際放送局多言語メディア部)

「家庭科」という切り口を通して、日本社会や暮らしの現状を海外に伝えるラジオ番組を制作している。番組は17言語で短波やインターネットで発信されており、主なリスナーは世界各地でその言語を話している人々である。番組は3年目を迎えており、これまでに「自立」「介護保険」「制服」など、20に及ぶテーマを取り上げてきた。

1 国は違えど暮らしの悩みは同じ?!

番組を立ち上げた当初、私が予想していたリスナーの反応は「日本の現実を知り驚きました」というものだった。たとえば「孤食」「ワーク・ライフ・バランス」などは、日本特有の問題だと思っていたからだ。ところが、その予想は裏切られた。例えば「孤食」はイランやバングラデシュにもあるそうだ。ポルトガルからは「『孤食』を社会問題と捉える視点を初めて知った」という感想が寄せられた。

日本の暮らしの中で起こっていることは、時差や程度の差こそあれ、世界で起こっているというのが、番組を作りながらの実感である。人口の都市集中、少子高齢化、家族の機能の変化、教育熱の高まりなど、世界は一つの流れの中にあることを感じる。これは、昨年ARAHE (アジア地区家政学会研究大会) で各国の専門家と話した内容とも一致している。

2 家庭科は「ざわめき」を起こす

番組のテーマを決める際、指針にしていることがある。それは「打ち合わせが盛り上がるテーマにすることだ。みんなが口々に自分の経験を語り始め、怒ったり笑ったりするようなら、そのテーマは多くの人にとって当事者性が高く、リスナーも面白がってくれる。

取材が終わったら、まず日本語台本を作る。それを各言語の制作チームに配布すると、一斉に翻訳され、スタジオ収録が行われる。その各言語の担当者達が、私にとっていわば最初のリスナーである。

私の職場は大部屋で、17言語がそれぞれ島を作っている。なので、仕事の気配がお互いに分かる。家庭科の番組の時はいつもより職場全体がざわざわするよう

な気がする。耳を澄ましていると、やはり自分の話をしていたり、持論を述べたりしていて面白い。わざわざ私の所まで来て「タイでは大学まで制服があるか問題だと思う」など、自国の状況について熱く語ってくれる人もいた。「拝聴しました」で終わらず、自分に引き寄せて考えることにつながっていくのは、まさに家庭科の力だと思う。

3 多様性の難しさ

制作現場では、簡単に答えの出ない問題に直面することもある。

「婚姻届」をテーマに制作した時のことだ。3組のカップルをインタビューするという内容で、1組目は法律婚をしたカップル、2組目は別姓の事実婚カップル、3組目は同性のカップルだった。

国際放送では、性的マイノリティは気をつかうテーマである。国や文化によってはタブーだからだ。これまでニュースで触れたことはあっても番組で上げたことはない聞いていた。そこで今回は、1組目と2組目だけでも番組が成立する仕組みにして、3組目を放送するかしないかの判断は各言語の担当者に委ねた。その判断の参考のために、この件に対する国連の見解の資料などを配布した。

この時は、いつもの何倍ものざわめきが職場に広がった。アラビア語やペルシャ語など「難しいだろう」と予想していた言語が「放送する」と判断した。私の担当はイスラム教徒とヒンドゥー教徒が多いベンガル語であった。同僚と相談して「やるべきだ」と一度は結論したのだが、その翌日イスラム教徒の同僚が「話がある」と声をかけてきた。内心では反対だったのである。思い詰めた表情を見て、私はゼロから議論をやり直し、結果的に同性カップルの紹介はやめた。

「多様性の尊重」の意味を問われる場面であり、判断は簡単ではなかった。取材協力者の顔や、抑圧的な社会で声を上げられずにいる当事者の姿が脳裏に浮かんだ。一方で、受け入れ難いと言っている相手に敢えて伝えることは、対話の意義の否定になるのではないかと、とも思った。

このような葛藤は、社会の様々な場所で起きているのではないだろうか。だからこそ私は家庭科に期待をしている。多角的に、継続的に考え続けることを促す教科だと思うからだ。

多様性を育む教科としての家庭科に期待！

南野 忠晴 (元大阪府立高校家庭科教員)

自分でもどういふわけでそうなったのかよくわからないが、気づいてみると、高校を早期退職し過疎地でカフェを開業していた。新築で買ったマンションを売り払い、築75年の古民家を買って改装、週休2日、10時～18時の営業だが、買い出しや仕込み、掃除や草刈り、薪割などやることが多く、労働時間はしっかり長い。逆に客数は本当に少ないので、夫婦二人の労働を時給に換算して考えるなんて、恐ろしくてとてもできないような状況だ。でも、楽しい！

「組織に属する」という働き方と、「自営する」という働き方が、生活の「気分」に与える影響がこれほど違うとは思わなかった。自営業者の知り合いが格段に増え、その人たちとの会話に影響されている部分もあるかもしれない。テレビや新聞のニュースをどう見るかということさえ微妙に違ってくる。面白い！

教員時代は生徒たちに「いろんな働き方がある」ことを伝え、多様な選択肢の中から自分なりの職業を選ぶようにと助言してきた。でも、それは頭の中だけの、上滑りの助言だったかもしれない。今は、概念や理屈としてではなく、身体感覚としてわかる気がする。

このあたりは、いたるところに空き家があり、周りは休耕田や耕作放棄地だらけ。高齢夫婦のみ、あるいは高齢で一人暮らしという家が大半を占める。お年寄りたちの努力で、今は町の景観が美しく保たれてはいるが、今後予想される人口の急減とともに、その維持が困難になるだろう。さらに時が経てば、人間が開墾する前の原野に戻るのかと思うと感慨深いものがある。

日本は、人口減少社会の入り口に入ったといわれるが、僕は今、その最前線のひとつを体験しているのだろう。今までは漫然と「社会は膨張と成長を続けてゆくもの」ととらえてきたが、局面は明らかに変わった。「社会は縮小し衰退？してゆくもの」というのが、これからの常識になるかもしれない。そして、僕たちが目の前にしている子どもたちは、これからそういう社会を生きてゆく人たちなのだ。

現場の教員は、この大きな変化をどれだけ「体感」しているだろう。もし移住していなければ、僕は、そこまで差し迫ったものとは感じてなかったと思う。都市部在住の教員が実感するには、まだまだ「遠くので

きごと」だったからだ。

教育は「子どもたちの未来を共に考える営為」と定義できる。今後、どんな風に展開するか誰にも予測がつかない「未来」に対し、どういふ戦略で臨むか。僕は、どんな状況が来ても柔軟に対応できる力を身につけ、とにかく「生き延びること」を最優先にすべきだと考える。それには、家庭科がこれまでやってきたことと家庭科だからこそ展開できる授業が役に立つ。役に立つというより、今ある教科の中では、家庭科にしかできないことだといってもいい！

「生き延びる」には、とにかくにも「生活力」が必要だ。それは家庭科が扱ってきた教科内容そのものだ。自分の頭と体を使い、日々の暮らしを整えられるようになれば、なんとか命は繋がり、与えられた状況の中で少しでも健康的な暮らしが指向できるだろう。

家庭科だからこそ展開できる授業とは、子どもたちが持つ多様な生活体験や生活実感、指向や目標など生き方についての考え方（僕は生活哲学と呼んでいる）を教室の中でぶつけ合い、議論したり、共感したりする時間を持つことだ。生徒たちが本音で自分の生活哲学を披瀝してくれるなら、それは生活背景や生活実感の中から体感を伴って発信されるだけに、重く、深い。

教室をそれぞれの考え方を「肯定的に」共有する場にできたなら、発言者にとっては自己肯定感へと繋がる勇気づけとなるだろうし、聞くものたちにとっては、人生の選択肢を増やしてゆく絶好の機会となり、異質なものを異質なままで受け入れる寛容性や、異質なものと連携してより複雑で豊かな関係性を平和的に築いてゆく訓練の場となる。

変化の時代を生き延びてゆくには、移ろいやすい他人からの評価や社会の風潮に振り回されず、自分の感覚を大切にすることが大切だ。「自分に開き直る力」というか、「自分は自分でいいじゃないか」という感覚だ。また、自分の中に人生の選択肢がたくさんあれば、状況の変化に応じて生き方を変えてゆける。「柔軟な対応力」だ。そこにいろいろなひとと「連携する力」が加われば、どんな社会になろうとも自分らしく生きていけると信じた。家庭科の教室でならそんな教育ができる。家庭科でやれることはまだまだたくさんある！

「家庭生活に関わる意識や高等学校家庭科に関する全国調査」から

高木 幸子 (新潟大学)

2016年度に学会特別研究委員会が実施した「高等学校家庭科男女必修の成果と課題を探る社会人調査」(以下、社会人調査)、「家庭科の意義・役割や生活実態を探る高校生調査」(以下、高校生調査)の結果を基に、高等学校家庭科履修の成果の一部を報告した。

I 社会人調査

社会人調査は、2016年7月～11月に全国20歳以上の社会人1,266人を対象に行った(分析対象者数:数量的分析827人,自由記述分析927人)。分析対象の女性は、就業率86.5%,正規職員53.0%で、全国平均に比して就業率,正規職員の割合が高い集団であった。

(1) 家庭科を学んでよかった内容や理由

分析対象者の約95%が、高校時代に家庭科を学んでよかったと回答し、高校時代の家庭科履修を肯定的に捉えていた。学んでよかった内容は、衣生活,食生活が多く、女子のみ必修世代の男性は、高校時代に家庭科を履修していないにもかかわらず、ボタン付けなどの基礎技能を学んでよかったと回答していた。また、男女必修世代は、多角的に捉えることや生活を見つめ直す機会となったこと、女子のみ必修世代では、生活の科学的な裏づけを学んだこと、自立した生活や家族の一員として考えられたことが学んでよかった「考え方・価値観」として記述されていた。さらに、社会人になった後に、男性は自身の健康や一人暮らしの生活に役立ったこと、女性はそれに加えて子どものために役立ったこと、職業選択に生かされたことなどが学んでよかった理由として記述されていた。

(2) 家庭科を履修して身についたと考える力

全体として、「生活に関する基礎的な知識・技能を習得した」と捉えられていた。男女必修世代の方が女子のみ必修世代よりも「家庭生活は男女が協力して営むものと考えようになった」と考えていた。また、男女必修世代の男性は、女子のみ必修世代の男性よりも、子育て参加や家事分担・協力などの実践度が高かった。これらの結果は、男女必修家庭科の成果と考えられた。

(3) 家庭科の教科観・学習観

調査結果から、家庭科は、生活に必要な能力を獲得する教科、生活を多面的に捉える総合的・実践的教科であると捉えられていた。また、これからの家庭科の学習に対して、「衣食住の知識や技能の習得」「家族や家庭生活、子どもや高齢者、社会福祉などについての理解」を重視することを期待していた。

(4) 後悔や要望

男女必修世代の男女(約1割)が、高校時代に家庭科をまじめに学習しなかったことを後悔・反省していた。男性は、自分の生活に役立ったことによる意義や若い世代に期待していた。女性は、男女がともに生活を営むことを肯定し、社会を見る目を養うことを要望していた。

II 高校生調査

高校生調査は、2016年7月～2017年1月に、全国国公立全日制高等学校50校に在籍する4,980人を対象に行った(分析対象者数:質問項目の完全回答者4,302人)。よりよい生活を営むために必要な生活実践・活用能力(自立,共生,消費・環境,情報の実践・活用)に関する11項目について、いつもする～しないの4件法で調査し、平均点を基準に、上位群,下位群に分けて比較・考察した。

(1) 生活に関する意識

生活に関する意識は、全項目で、上位群の方が下位群よりも高かった。また、「ジェンダー観」「自己理解・自尊」「自立と共生」は、男性よりも女性の方が高く、「市民性(政治関心)」は、女性よりも男性のほうが高かった。

(2) 家庭科で獲得したと考える力

全体として、「グループ活動(協働)」「男女協力」「将来(思考判断)」「生活知識」「他者理解(知識理解)」などの項目は、身に付いたと肯定的に回答する生徒の割合が高かった。この結果を、生活リテラシーの上位群,下位群に分けて比較すると、上位群の高校生は、ほとんどの内容について8割以上獲得したと考えており、下位群の高校生は、獲得したと回答する項目の数が減っていた。

(3) 家庭科の教科観

9割以上の高校生が、家庭科は他教科と違った生き

た勉強ができると家庭科の独自性を認識し、8割以上の高校生が家庭科を「生活の見直し」「協働」「人生設計」「生活問題解決」を学べると肯定的に評価していた。

以上、2つの調査から、高等学校での家庭科履修を通して、生活を支える知識・技能の習得だけでなく、生活を多面的に捉え豊かにする力を身に付けることができることを認識されていることがわかった。

基調講演・トークセッションのまとめ

コーディネーター

荒井 紀子 (大阪体育大学)

本大会では、「“未来をつくる力”と家庭科」というテーマのもと、当初、内田樹氏による基調講演と、それに続く南野忠晴氏、高木幸子氏、内田氏3人によるトークセッションを予定していた。しかし、豪雨のために内田氏の参加が叶わず、内田氏から送っていただいたメッセージを代読するとともに、急遽、当学会員でNHK国際放送局の草谷緑氏に登壇を願い、南野氏、高木氏と3人のトークセッションを行うことになった。

振り返ってみると、内田氏の直接的な参加はなかったものの、そのメッセージを受け取ったうえで、立場の異なる3人のゲストによる話や議論は、家庭科教育の今日の意味を浮き彫りにするという意味で、結果的に興味深いセッションになったのではないかと思う。

まずは、4人の立ち位置について、家庭科との距離や関わりの度合いから確認してみたい。メッセージを寄せてくださった内田氏は、哲学を研究する思想家であると同時に武道家でもある。大学教員歴が長く、教育への造詣も深い。時代の諸問題について積極的に発言しているが、家庭科との接点はほとんどなく、今回はご自身の体験と感性にもとづく家庭科論を語ってくださった。次いでNHK国際放送局の草谷氏は、教育や家庭科は専門外であるが、番組制作のディレクターとして家庭科の高校講座を担当し、その経験のもとで、日本の家族や生活の問題を家庭科という切り口を通して、他国に発信する多言語の番組作りを行っている。外部から家庭科の面白さを発見し、それを仕事に生かして発信している人である。次に南野忠晴氏は、高校の英語教師として出発した後、家庭科の面白さに気づいて家庭科専科となり、高校現場でユニークな授業を

行うとともに、家庭科の重要性や楽しさを書物や講演を通して発信してきた。家庭科の外から内に入ってきた人である。最後の高木氏は20年近く中学校の現場で家庭科教育に携わり、その後、大学に移動し家庭科教育学の研究者となった。まさに家庭科の内部で経験を積んできた人である。

このように、立ち位置が異なる4人が、それぞれの立場から家庭科への想いや捉え方を語った。

まず内田氏は、父子家庭でのご自身の子育てや武道家としての体験から、家事や家庭科について述べている。家事は、「他者の身体が経験する生理的な快適さを想像的に先取りする能力」であり、「緊急な介入を求める他者からの救援信号を感知すること」であるという。日常の生活のなかでは他者の身体を気遣い、その声に応えながら「清潔な住まい」「着心地のよい衣服」「おいしい食事」をつくることであり、それは「他者と共生する能力」と言い換えることもできる。これらは人間にとって重要な能力であり、家庭科はこの能力の獲得に関わる教科であるが、この能力の大切さについての社会的合意は不足していると指摘している。

次いで草谷氏は、家庭科を切り口として家族や生活問題を番組で取り上げるなかで、日本の暮らしの問題が17言語で発信される先の各国の問題とひとつつながりであることに気づいたという。また、興味深いテーマについて多国籍のスタッフが、自分の問題に引き寄せて考えており、それが職場に刺激的な「ざわめき」を引き起こしているという。家庭科は国や文化の多様性を超えて、問題を多角的、継続的に考え続けることを促す教科であると指摘している。

南野氏は、教育を「子供たちの未来を共に考える営為」ととらえ、予測のつかない未来に柔軟に対応して生き延びる力をつける教科としての家庭科に注目する。家庭科がこれまでやってきたこと、家庭科だからこそ展開できる授業が役に立つという。この授業とは、「子どもたちが持つ多様な生活経験や生活実感、指向や目標など生き方についての考え方を教室の中でぶつけ合い、議論したり、共感したりする時間を持つこと」である。柔軟な対応力と、異質なものを異質のまま受け入れ、豊かな関係性を築く力をつけることが重要であり、家庭科ならそれができると語った。

最後に高木氏は、学会特別研究委員会が2016年に実

施した社会人、高校生対象の全国調査の結果について報告した。社会人の9割以上が家庭科を学んでよかったと回答し、生活に関する基礎的な知識・技能を習得したと捉えていたこと、また1994年以降の男女必修家庭科を学んだ男性は、家庭生活での男女協力の意識と実践度が高く、これらは男女必修の成果と捉えられるのではないかと指摘した。高校生は、家庭科を他教科と違った生きた勉強ができると捉え、「生活の見直し」「協働」「人生設計」「生活問題解決」を学べる教科とみていた。これら2つの調査から、家庭科が生活の知識・技能だけでなく、生活を多面的に捉え豊かにする力をつける教科と認識されていると語った。

その後、コーディネーターが複数の議論の柱を提示し、それについて3氏による自由討論を行った。主な論点と議論について紹介する。

○全国調査にみる男女必修家庭科の影響について

- ・男女必修が生徒にどんな影響を及ぼしたかは、時代の変化や家庭科の学習内容の変化等もあり、解釈が難しい。その一方で、若い男性の子育てへ関わろうとする意識は確かに変わってきていることを皮膚感覚として実感している。また男女必修の授業が開始された年に、女子必修で学んだ女子生徒が、男女必修の授業を見て「この子らは男女と一緒にやるのが当たり前と思って大人になるから羨ましい。私たちの学年の男子は違う。」と語っていた。共に学ぶことの影響を生徒たちは感じとっていた。(南野)

○内田氏の「他者からの信号を感知し、それに生活の技をもって応え、他者とつながる」視点について

- ・いわゆる教育困難校で家庭科を教えた新任の時代、普段は授業に出ない生徒が調理実習時には嬉々として登校し、他の生徒の学習を乱さない絶妙な距離感でコミュニケーションをとりあっていた。調理実習という食べ物をつくる営みの中で生徒同士が呼応する様子を見て、家庭科の可能性を感じた。(高木)
- ・家庭科を他国に紹介すると、受け取る側は、異質な制度や教育について反応するというより、むしろ、自国のことを考え、自分に引き付けて考えるという様子がみられる。その自己理解が他者理解とつなが

っていくことで様々な相互の気づきが生まれていく。(草谷)

- ・他者の体におこっていることを感知し、つながることは大事だが、その関係性はあくまでも対等なものではない。(南野)

休憩後、参加者から、授業の中で価値観をぶつけあい声を聴きあう学習の難しさや、オープンエンドの授業等についての質問がだされ、以下の応答があった。

- ・生徒には、人と違うことを言ってクラスの中で浮いてしまうことへの恐れがある。何を言っても大丈夫、という安心できる場を整えるとともに、生徒のぼそぼそした小声に耳を傾け、本気で聞き取ることが必要である。そうすることは教師にとって多くの発見があり、楽しいことでもある。(南野)
- ・授業は未来に向けて開かれているという意味でオープンエンドだが、その探究の過程に知識やスキルを入れ込む必要がある(高木)

セッション終了後のアンケートでは、回答者70名のうち約6割弱が大変有意義、3割がやや有意義と回答していた。自由記述には、「考えたことがないこと、考えなければならないことを再認識できた」「未来を創る力という意味での家庭科の学びについて本音が聞けたし、考えさせられた」「内田さんの不参加は残念だったが、コメントは聞き応えがあり、未来に向けての強いメッセージを受け取った」等の意見がみられた。

今セッションでは、専門分野やキャリア、家庭科との距離など、立ち位置の異なる4人による発言や対話を通して、多角的に、かつ深く家庭科へ迫ることができた。また、「他者を感知し、つながりあう」、「多様な価値や考えを受け入れるとともに、生活力を鍛え、オープンエンドの未来に向け力を発揮する」など、これからの家庭科を展望するうえで含蓄のある新たな視点が提起された。それぞれの学会員がこれからの研究や教育活動を追究していくにあたり、大いに刺激的な機会となったのではないだろうか。